

エッセイ

アイ・ラブ・パース

ークリスマスオーストラリアで考えたことー

松村 茂治

【なぜパリではなくパースなのか】

ここ数年、本誌に親しんでいた方の中には、「おや？」と思われた方がいらっしやるかもしれない。ほぼ隔号で認めてきたエッセーは、「アイ・ラブ・パリ」だったからである。なぜ今回、パリではなくパースになったのか、まず簡単にその説明をしておこう。

話は、昨年の夏に遡る。西オーストラリア・パース在住の古くからの知人ヘレンが仕事で来日した際に、思わぬ情報をもたらしてくれたのだった。しばらく中断されていた成田・パース間の直行便が、この秋から再開されるという

のである。

初めてパースに出かけたのは、わが家の子どもたちが小学生のときだから、もう三十年近くも前のことになる。そのときは直行便が運行していたので、子連れではあったが、移動にはそれほど苦労はなかった。その後、何度か彼の地を訪れているが、直行便はなくなり、常にシドニーやメルボルンを経由してのパース入りだった。

一言で経由と言っても、飛行場では国際線から国内線への移動がある上に、大陸の東海岸から西海岸までの横断には四時間以上かかるので、我が国で言えば、東京から北海

道へ行くのに、台湾を経由するみたいな話になるのである。それが直行便というのがある。しかも、彼女の話では、直行便再開には記念キャンペーンがあるはずだから、早めに予約をすれば、かなりの格安で行けるだろうというのである。便利になる上に安くなると聞いて、急にそわそわした妻の気持ちも分からなくはない。

妻は、決してケチな人間ではなく、むしろどちらかというと大らかな方だが、ときどき「お得」情報に異常に敏感になることがある。例えば、某鉄道会社の「年寄りの休日クラブ」では、どこまで行けば、一回で年会費の元が取れるとか、某デパートの「ジジ・ババ友の会」では、一割近いボーナスがつくので、会員にならない手はないといった類のことである。どちらかというとケチな私としては、

「お得」というのが家計の出費を押さえるということなら、何もしないでじっとしていた方がよっぽどの「お得」だと思うのだが、妻は、お金を使わないで真の「お得」は味わえないといった、一見もつとらしい論理を展開するのである。今回の直行便は、そうした「お得」に敏感な彼女にとっては、逃してはならない千載一遇の機会なのであった。

妻は直ちに動き出した。いつものように、旅行会社に勤務する彼女の小学校時代の同級生K氏に連絡をとると、当初は割安航空券の存在を確認するだけのはずだったのだが、

早く予約を入れないとせつかくの「お得」の権利が利用できなくなってしまうので、航空券の予約だけはしておいたというのである。こういうときの言い訳の決まり文句は、キャンセルはいつでもできるということだが、実際にキャンセルしたことは、今まで一度もなかったと思う。秋に再来日したヘレンに航空券だけは手に入れたことを伝えると、宿泊は自分の家を使えばいいのだから、あとは何の準備もいらなと言われ、さらに、この年は自分の家がクリスマスパーティーの当番（後述）になっていて、そのために仕事は入れていないし、南半球のクリスマスを体験するいい機会だから、絶対に来なければいけない、ということになってしまったのである。

もともと出不精なたちなのである。それが年を取るともにますます出るのが億劫になってきた。国内旅行でも面倒くさいと思うのだから、海外旅行ではなおさらである。

何が面倒かというと、まず第一に食事である。若い頃は、好んで洋風料理を食べたが、最近は、積極的に肉を食べたことは思わなくなった。いい肉を食べていないのだろうと言われれば、否定は出来ないが、肉は見ただけで胸やけがするような気がする。次に述べる第二の面倒とも関連するが、店に入って、どう注文すれば胸やけしない食べ物が出

てくるのか分からない。国内なら、店の見当もつくし、ほとんどの店にサンプルが用意されているので、注文に当たって困ることはない。それが海外となると、どんなものがどれくらい出るのか、見当がつかないのである。以前、この国のリゾートでトマトスープを注文したところ、料理用のボールのような器で出てきたことがあった。もちろん一人分である。外国に行くと、分量もなかなかの強敵なのだ。教科書の英語は読んでも看板やメニューの説明を理解するのは容易ではなく、結局、漢字で見当のつく中華料理屋か日本料理屋を探すことになるのだが、海外で和食の看板を掲げる店の中には、日本人ではない人たちによって運営されていることも多く、そんな和食を食べるために、わざわざ外国に行くか？と思ってしまうのである。

もう一つの面倒はコミュニケーションである。

以前にキャンピングカーでこの地を旅したときのことである。妻が、キャンプ場の洗濯場まで行くと、洗濯機の使い方が分からないで困っている外国人がいた。もちろん妻も初めて使う機械でよく分からず、おまけに、その外国人が使っていた言葉が、英語ではないということ以外、さっぱり分からず、あちこち押したり叩いたりしているうちにようやく動き出し、その外国人と喜びを共にしてきたということがあり、それ以来、妻は、コミュニケーションは心

の問題であり、断じて言葉の問題ではないという信念を持つようになった。

確かに、言葉は二次的なものに過ぎないという考え方もあろうが、私にとっては、言葉が通じないことが辛いのである。どこに行っても片言の英語と身振り手振りでも何とかなるというのが現実とは思わが、それでは不満なのである。せっかく普段会えないような人たちに接する訳だから、もう少し内面的というか心のひだに触れるというか、そういうコミュニケーションを望むのである。もつとも、お前は日本語でそういうコミュニケーションを心掛けているのかと問われると、俯くしかないのであるが・・・。

少々脱線するが、オーストラリアの東海岸にあるメルボルンから西海岸にあるパースまで、大陸を横断するインディアン・パシフィック鉄道が運行していて、一度乗りたいと思っているが、四泊五日もかかる列車旅行では言葉が通じなかったら、ほとんどそれは護送列車になってしまうような気がして、まだ実現していない・・・というか、今のコミュニケーション能力では、永久に実現できないだろうと思っている。

こうした食事や言葉その他諸々の面倒を避けるためにバック旅行があることは知らないわけではない。しかし、それでは旅の面白さが味わえないというか、予期しない出会

のである。

私たちの隣のテーブルでは、トランクを開けさせられ、中身を出すように指示されている日本人らしき旅行者がいた。まさかとは思っていたが、そのまさか、我が身にも降りかかったのである。一体、何を疑われているのか見当がつかないのだが、係官は、慣れた手つきで（まさか、私たちが常習の運び屋と見ていたわけではないだろうが）、トランクの中身を出させると、次々と「これは何だ？」と尋ねてきた。

オーストラリアは、カモノハシやコアラなどが生息していることから分かるように、特異な生態系を有する国で、海外からの動植物の持ち込み、特に卵（例えば、イクラの瓶詰めなど）の持ち込みにはかなり敏感になっているということは聞いたことがあった。以前に、現地でおにぎりを作ろうと、乾燥海苔を持ち込もうとして引つかかったことがあったが、そのときははたいした問題にはならず持ち込むことができたので（よく覚えてはいないが、「これは海草だが、持ち込んでいいのか」と、こちらから尋ねたような気がする）、今回もその程度のことと思っていたのだが、事態はそのときよりはかなり深刻な様子だった。

今回の旅行では、妻がトランクの中に、大量の食料品、特に菓子詰め込んできていた。もちろん特別なものでは

いの中にこそ旅の楽しみがあるのではないか・・・などと考えてしまい、行きたいのか行きたくないのかはつきりしろ！と言われると、やはり、じつとしてるのが一番の「お得」ではないかと、堂々巡りに陥るのである。

こうした、私なりに複雑な思いを抱えながら、気づくと機上の人となっていた。

【ワンコに、あつぱれ？】

今回の旅に関係するパンフレットや記念品を入れた袋の中に、「警告通知」と表示された一枚の印刷物が入っている。パース空港でいただいた貴重な書面であるが、その入手経路は、以下の通りである。

飛行機から降りて、搭乗前に預けておいた旅行鞆を引きとり、入国審査に向かうまでは何の問題もなかった。前を歩く人たちの多くが、係官によって左手の窓口の方に行くように案内されていたが、時々、右手に行くように指示されている人がいることには気づいていた。窓口の混み具合を考えてのことだろうくらいにしか考えていなかったのだが、それは大きな間違えだった。

案内された右手のテーブルには数人の係官がいて、何やら怪しげな動きをしていると思っていたが、実際は、先方がこちらのことを怪しげな動きをしていないか、見ていた

なく、普通のスーパーマーケットで売られている子ども向けの菓子で、クリスマスパーティーに集まる子どもたちに配るためのものである。

煎餅やキャンディなどの菓子は問題なく、係官のお兄さんに探し出され、「これは何だ？」と尋ねられて説明に困ったものは以下の品々である。

その一つは、子どもたちに「みたらし団子」の作り方を教えるために持って来た、袋に入った団子粉（白い粉！）である。これは、知人の子どもたちの好物で、わが家に来たとき、度々コンビニで買ってきては一パックをペロリと食べていたのである。もう一つは自分たち用のもので、和食が恋しくなったときに使う予定の「和風出しのバック」である。以上の二点は、質問はされたが、厳しく追究されることはなかった。やや問題になったのが、一粒ずつ袋に入った梅干しで、お兄さんは、袋を開け指でつぶすようにして臭いをかいでいた。日本のプラムだと言うと、それが通じたのか、間もなくこれも無罪放免になった。そして、一番問題となったのが、透明なプラスチック袋に入ったナトリの「イカの燻製」である。

係官のお兄さんは、これは魚ではないのかとしくく聞いてくる。確かに、乾燥され、細くちぎられ、味もつけられていて、あの十本足の生き物を想像することは難しいが、

海産物であることには違いない。

お兄さんは、自分の持っていた英文の入国カード（税関・検疫申告書）を示しながら、「この文の意味は理解出来るか？」と聞いてきたので、「この程度の英語なら理解出来るし、こうして日本語も持っている」と言って、日本を出るときに渡されていたプリントも見せたのだが、こちらの英語がたどたどしいのにしびれを切らしたのか、お兄さんは、少し待っているように言い残して席を外すと、間もなく分厚いファイルを抱えて戻ってきた。ファイルを開くと、先ほどの英文の入国カードの日本語訳（私の持っていたものとはほぼ同じもの）の拡大コピーがファイルされていて、その一つ一つの項目を指さしながら、それを読めというのである。

改めて読むまでもなく、そこにはオーストラリアへの持ち込み禁止物品が箇条書きでリストアップされていて、機中でチェックしてきたものと同じ物である。

鉄砲だの麻薬だのポルノなどは、当然のことながら持ち込みではないので、チェック欄には「×」を記入してきた。大体、こういうものは、全ての項目で「いいえ」にチェックすればいいのだという思い込みがあった訳だが、よく読むと、真ん中あたりに「食肉、家禽類、魚、海産食物、卵、乳製品・・・」とあり、「イカの燻製」は見事にひっ

かかっている。

お兄さんは、私たちの所から離れると、数人の係官と何やら相談を始めた。おそらく、悪質かどうか、どの程度の処分にするかについての相談だったのだろう。その間、没収した重そうな米の袋を担いだ係官が、目の前を通っていくのを見て、自分たちは今、ひよっとするとかなり危ない所にいるのではないかという思いを抱き始めたのである。

以前に、オーストラリアから出国する際に、トランクに入れて預けてしまえば問題なかったワインとオリブ・オイルを、うっかりして機内持ち込みの手荷物に入れてしまい、空港で没収されたことがあった。そのときは、係のお兄さんは、「これはダメだからねー」と、ニコニコ顔で没収したのではなかったか（あれは、絶対に後で仲間で呑んだと思う）。だから、今回は「イカの燻製」の没収かと覚悟を決めたのだが、ことはそれほど生やさしいものではなかったようだ。

話し合いは、かなり長い時間に及んだような気がする。しかし、話し合いを終えて戻って来たお兄さんが告げた結論は、「厳罰」を覚悟していた私たちにとっては、やや意外なものだった。再度、入国カードのファイルを開くと、「この品物はこれに該当するのだろう」と、魚、海産食物を指さし、私がうなずくと、それだったら、ここは「いい

え」ではなく「はい」にチェックしなければいけない、と言って、すでに提出してあったカードを訂正させると、問題となっている「イカの燻製」を返してくれて、持つて行っていいというのである。

そのとき、「イカの燻製」と一緒に手渡されたのが、日本語と英語で書かれた「警告通知」である。そこには、入国カードの質問には正直に答えなければならぬ旨が書かれ、「・・・違反は、現行犯による四二〇豪ドル（約三万円）の罰金、民事上の罰則、あるいは刑事上の訴追の適用を受ける可能性があります・・・」と続いている。

入国審査は、一時間ほどで解放されることになった。建物の外で待っていてくれたヘレンは、何かまずいものを持ちこもうとして見つかつたのだろうと、ズバリの推測をしたが、罰金も取られず品物も返してくれたことを告げると、それは運が良かったのだとのことだった。私たちより少し先に取り調べ終了となって出て行った女性がいたが、その女性がヘレンの脇を通り過ぎるとき、迎えに来ていたらしい連れに、三、四万円の罰金（追加の税？）を取られたと話していたというのだった。

そもそも、元をたどれば、イカの燻製は、ヘレンの娘の好物ということで持ってきたものであり、責任の半分は彼女の側、つまりオーストラリア側にあると居直つたところ

で、大目に見てはもらえなかっただろうから、やはり運が良かったということになるのだろう。

罰が思ったより軽かったこともさることながら、もう一つの疑問は、二百個も三百個もある荷物の中から、トランクを開けずに、どうやって私たちの荷物に目をつけたのかということである。ベルトコンベアから荷物を受け取り、入国審査に向かう乗客の道案内（窓口の振り分け）をしていた係官は、私たちの荷物の中身が怪しいということは、すでに知っていたのである。怪しい者だけを一般とは違う窓口案内していた訳だから。

おそらく、第一発見者は犬だったのだろう。空港や港湾の税関の裏側で、薬物に目を光らせる、ナトリではない「マトリ」の活躍を追うドキュメンタリー番組を見たことがある。確かに、荷物がベルトコンベアに乗って旅行客の前に現れるのに先立って、訓練を受けたワンコが、トランクの一つ一つを飛び越すようにして、クンクンとやっている場面があった。しかしながら、発見したのが、大麻や覚醒剤ではなく「イカクン」では、せつつかくの手柄も、少々気の毒な気がしないでもない。

なぜ警告通知だけで、罰金やそれ以上の罪にならなかったのかは分からない。あまり悪いことの出来そうな人たちではないとの判断を下してくれたものと思われるが、実際、

危ない所だったのだと思う。

このときのやり取りを思い出して気づいたのだが、係官に、「カードに書かれた英文は理解出来るのか」と、問われたときの、こちらの答え方がまずかったのではないかと思うのである。お兄さんの質問は、一度ではなかった。こちらとしては、何十年も英語をやって来たこともあり、会話は出来なくともこの程度の英語は読めるのだと言いたくなってしまうが、ここはそうした見栄やプライドは捨てて、「ワツカリマセン」と従順に（？）答えるべきではなかったかと思うのである。そのために、お兄さんは繰り返し返して聞いてきたのではなかったのか。ここは、極めて大事なところで、英文が理解出来たのにもかかわらず、「いいえ」にチェックをしたということは、明らかにウソをついていることになるのである。入国カードが自己申告なのは、信頼の原則の上に成り立っているからである。ウソはそれを根底から覆す行為であり、係官にとっては、それこそプライドを傷つけられる行為となるに違いない。禁止物品を持ち込むより、ウソをつくことの方が遥かに罪深い行為となるのではないか。

帰って来てしばらくすると「新型コロナウイルス」の問題が勃発し、連日、マスクミで取り上げられる事態となっ

た。偶然、カーラジオで聞いていた国会中継のなかで、感染症に関する対策を質問する議員が、オーストラリアの検疫制度を引用し、申告に違反があれば罰金や観光ビザの剥奪になる場合があると説明していた。罰金は四二〇豪ドルのことだろうと理解したが、先の警告通知にあった「民事上の罰則」が、観光ビザの剥奪のことだったとすれば、私たちは本当に危ない所にいたことになる。厳罰を覚悟したなどと述べたが、軽々しくそんなことは言うてはいけない。このエピソードは、「ワンコに、あつぱれ！」ではなく、「松村に、喝!!」と言うべきだろう。

【実録・見るサル・聞くサル・言うサル】

十年ほど前、郊外にあるヘレンの家からパース市内に向かう電車の中で見かけた車内広告について、エッセイで取り上げたことがある（本誌第二十七号）。以下のような内容である。

それは、幼児向きの絵本にあるような、単純化されて描かれたサルが三匹並んでいるポスターで、どこかで見たような気はするが、少し様子がおかしい。左の一匹は目に双眼鏡を当て、中央の一匹の耳は顔より大きくデフォルメされ、右にしている一匹は拡声器を口に当てている。そのキャプションには「人の迷惑になる行為を見たり聞いたりしたら、

声を上げよう」とあり、大きな耳も双眼鏡も、そのための小道具であることはよくわかるのだが、なぜキャラクターがサルでなければならないのか、疑問が残ったのである。改めて述べるまでもないが、いわゆる「三猿」は、動物の「サル」と否定の「・ザル」をかけ合わせたところに面白みがあるわけで、モンキーやエイブでは意味をなさないと思うのである。

今回乗った車輦にも、十年前と同じポスターが貼られていたので、私の疑問とは裏腹に、説得力があり、多くの人に支持されているポスターなのだろうと思う。

その車内ポスターの真下で、ポスターに書かれている通りのことが起こったのである。

パース市内で一日過ごし、ヘレン宅へ戻る電車を待つていたときのことである。赤ちゃんを抱いた若夫婦が、私たちの近くに立っていたことには気づいていた。入って来た電車には、同じドアから乗り込んだが、赤ちゃん連れは右方向に、私たちは左方向に進んで、同じ側の席に着いたので、彼らがどこに座って何をしていたのか、私たちからは全く見えてはいなかった。

駅を出てしばらくすると、車内のどこからか女のしわがれた大きな声が聞こえてきた。声のする方に目をやると、Tシャツにジーンズ、化粧つ気もなく髪はボサボサで、身

なりには気は遣っていないといった感じの中年女が、向かい側の席の方に腕を伸ばして、大声をあげているのである。指さされているのは、さきほどパース駅から乗り込んできた赤ちゃん連れらしく、何を言っているのか正確なところはわからなかったが、そこは赤ちゃん連れの席ではないとか、車内でミルクをあげるのは止めなさいとか、何かを責め立てているような様子だった。たとえその女の言っていることが正しいものであったとしても、その言い方が何とも場違いで、周囲をはばからない大声をあげてのもの言いに、一人二人席を離れて行く人もいたが、ほとんどの人は、不快な思いを抱きながらもそのまま座り続けていた。そのうち、女の近くにいた誰かが何かを伝えたのかもしれない。女は声をトーンダウンさせ、アイム ソーリーと言ったようにも聞こえたので、ことはそれで終わるのかと思ったのだが、トーンダウンはしたものの、相変わらず、何か注文をつけているのか、言い訳をしているのか、女の声は続いていた。

電車が一駅か二駅を過ぎた頃、突然、私たちの真ん前に座っていた中年男性が、その中年女に向かって声をかけ始めたのである。両者の席は離れていたのに比較的大きな声ではあったが、もちろん内容は理解出来なかった。おそらく公共の場なのだから少し控えたらどうかとか、こうして

外国の方(私たちのことだ!)も乗っていらっしやるのだからとか、たしなめているのだろうと想像した。

この日は月曜日だったが、すでに多くの企業ではクリスマス休暇に入っていて、この男性も、プライベートな時間を過ごしての帰りだったのだろう、オーブンシャツに半ズボン、それにウオーキングシューズといったラフな服装でちだったので、その外見から、職種や自分を判断することはできなかった。ただ、その物腰から、一定の教養を身につけた、それなりの立場のある中年紳士という印象を持った。

その語りかけが、大声になるわけでも高圧的になるでもなく、こうしたトラブル処理には慣れているといった感じの、相手を落ち着かせようとするような、穏やかな話し方だったので、そこに乗り合わせていた誰もが、少しホッとしたと思うのだが、残念ながら紳士の行為は、治まりかけていたように見えていた相手を逆上させる結果になってしまった。中年女は、今度はこの男性に矛先を向け大声をあげ始めたのである。

しばらくの間は、かなりの距離(車輛の半分くらい)を隔てての言葉でのやり取りだったが、一向に大声を収めない女に見切りをつけたのか、紳士はポケットからスマホを取り出すと、件の女に向けて動画を撮り始めた。

女は、はじめのうちは手で自分の顔を隠すようにして何事か喚んでいたが、やがて自分でもスマホを取り出すと相手に向けはじめた。それでも撮影を止めない相手に逆ギレしたのか、スマホを構えながら、紳士の前まで(つまり、私たちの目の前まで)やってくる、両者立ち上がったのやり合いとなった。

私たちの目の前で、互いに手を伸ばせば触れることができるような位置での、つまり一触即発状態での言い合いになった訳である。相変わらず、何を言っているのか分からなかったが、頭のすぐ上での言い合いは迫力があつた。

頭上での攻防は長くは続かなかつた。次の駅に電車が着くと、女が降りてしまったからである。その場に居にくくなつたからというのではなく、もともとそこが女の下車駅だったようである。少し離れた所に座っていた同年輩の女性も、彼女を追うようにして降りていったが、知り合いだったのか、偶然のことだったのかは分からない。妻は、大声をあげていた女はどこかの施設に入っていて、後を追うように降りたのは、施設のスタッフではないかというのだが、よく分からない。ドアが閉まると、紳士は何事もなかったかのような穏やかな表情で自分の席に戻った。

女の降りた次の駅が、私たちの降りる駅だった。駅が近づき、席から立ち上がったときに、目の前の席の紳士と眼

が合った。遠来の客人にとんだところをお見せしましたねえ、と言っているような表情だったので、「ありがとうございました」とだけ言つて、電車を降りたのだった。

それにしても、あの紳士は一体何者だったのだろう。スマホを取り出して撮影を始めたことが、結果的に相手を逆上させてしまったわけだが、それまでのやり取りは、極めて冷静沈着に見えた。身なりから、その身分や立場を想像することはできなかったが、物分りのあまり良くない人たちの扱いには慣れているような様子だった。はじめの対応を見ていたとき、私は、デパートか銀行でクレーム対応を専門にしている人ではないかと思つたほどである。スマホは、結果的に失敗だったのかもしれないが、一部始終を見ていた私たちにとつては、それは、ことを荒立てるための手段ではなく、最後の手段と言つたらいいのか、相手の女がどこかへ訴え出た際に、自分の身を守るための手段(ちようど、車のトラブルでドライブレコーダーが果たすような役割)だったように思えてならない。

両者言い合いの最中には全く忘れていたのだが、車内には、あの豪州版三猿がいたはずである。電車を降りてしばらく歩いてから、あの紳士は、見事な「言うサル」だった、と気づいた次第である。

【南半球のクリスマス】

クリスマスパーティーには準備段階から参加することになってはいたものの、家に着くと、部屋の間隙にはすでに来客用のお菓子が用意されていたり、クーラー・ボックスにはビールやワインが冷えていたりするので、大方の準備は済んでいるようだった。

二十四日の朝、ヘレンは、冷蔵庫から半分調理された状態の七面鳥を取り出すと、腹の中にカボチャやナッツなどを煮込んだものを詰め込み、オーブンに入れた。半日ほどで焼き上げるのだという。これがメインの料理になるらしい。

七面鳥が焼けるまでの時間を使って、メイン料理以外の食材の調達に行くというので、ついに行くことにした。どれくらいの分量の食材を用意するのか知りたくて、改めて参加者の顔を聞いてみた。主催者のヘレンには三人の妹がいて、彼女たちとその連れ合いのうちの二人、ヘレンの娘（大学生）と妹の娘二人（中・高生）、以上の九人が身内で、ヘレンの娘のボーイフレンドと中・高生宅にホームステイしているインド人の女子高生が加わり、それに私たち夫婦の、総勢十三人ということだった。

まずは、魚市場に行くのだが、十三人分の魚がどれほどのものか、想像も出来ない。マーケットに着くと、

る。そもそも、バーベキューと言った荒っぽい(?)調理法を好まない私としては、このような専門店のあることすら知らなかったのであるが(我が国にも、こうした専門店はあるのだろうか?)、この人たちは、肉でも魚でも、ダイナミックにかぶりつくことが好みのようで、出汁を取って、酒とみりんと醤油で味をつけて・・・といったチマチマした手順は好まないのだろう。

この後、スーパーマーケットに寄って、野菜や肉も用意したが、それについては割愛する。

家に戻ると、七面鳥が焼けていて・・・と言いたいところだが、大きかったせいも、まだ完全には火が通っていなかった。パーティーまで、まだ時間があるので、焼き時間を延長する一方、買って来た鯛に似た魚と、大きな伊勢エビを調理することになった。

この伊勢エビは、ヘレンの妹の亭主の一人が自分のヨットでインド洋に出て、捕獲してきたものだという。詳しいことは知らないが、彼は、売り物にはできないが、自分で食べるだけの獲物なら採ってもかまわないという免許を持っているのだという。訪豪前には、彼の船に乗って、三〇キロほど沖合にある小島まで出かけるプランがあったのだが、私たちが別の予定を入れてしまったこともあって、クルーズの話は立ち消えになってしまったようだ。

ヘレンは慣れた手つきで大きな鯛のような魚一匹とポタンエビのようなエビ一箱をかごに入れてレジに並び、魚の下ごしらえを依頼していた。下ごしらえが終わるまで、私は、売り場とそのバックヤードが珍しく、他の買い物客の迷惑になりながら、写真を撮ってまわった。

最近、わが家の近くに、新潟を本拠地にする大きな鮮魚店ができて、魚好きとしては重宝しているのだが、日本とことでは、売られている魚の種類もその売り方も、これと同業者かと思えるくらいの違いがある。大雑把に言えば、こちらは、鮮魚店というより魚工場と言った方がいいのか、まるでマーケットのすぐ裏が海になっていて、海からあげられた魚がそのまま並べられているような感じである。マグロのブロックも売っていたが、ここで刺身を買いたいとは思えないのが正直なところだ。母国に当たるイギリスでは、魚料理と言えば、フィッシュアンドチップスが真っ先に思い浮かぶようなお国柄だから、我が国の刺身から連想するような、繊細な魚食材を期待することには無理があるように思う。

次に、バーベキューコンロ専門店に寄った。魚を焼くためのコンロの燃料の調達である。店に入って驚いた。我が国の大きなスーパーマーケットの何倍ものスペースいっばいに、さまざまな形、大きさのコンロが並んでいるのであ

話が横道に逸れてしまったが、クーラー・ボックスには、大きな伊勢エビが四、五匹入っていた。フィッシュ・マーケットではこの大きさなら、日本円にして一匹五千円は下らなかったのではなかつたらうか。このエビは、そのまま、庭先に置かれたバーベキューのコンロで焼くことになった。これは、持って来た男性の担当だった。魚の方は、誰の担当だったか覚えていないが、これももう一つのバーベキュー用コンロに入れられた。箱で買って来たポタンエビは、バケツのような大きな鍋に入れて、茹でた。部屋の食器戸棚の上に、大きな、洗面器くらいの大きさの皿が重ねてあった。この家に来る度に、どうしてあんなに大きな皿が必要なのだろうと疑問に思っていたが、今回はじめて合点がいった。

すでに、つまみ食い、つまみ飲みは始まっていたが、日が落ちた頃、正式な食事となった。詳細は省くが、特記すべきことが一点、件の七面鳥の取り分けは、この家では参加者のうちの最年長者が行うことになっているということ、僭越ながらこの私が努めさせていただくことになった。

パーティーのメインイベントは、やはりプレゼント交換のようだった。参加者は到着すると用意してきたプレゼントの袋を、ホールに飾ってあるツリーの下に置いておく。

個人的な交換ではなく、その受け渡しが大セレモニーとなるらしい。

セレモニーは、ここ数年、最年少者の女の子（現在は中学生）によって進行されているとのことだった。

ツリーの脇に立った彼女は、何か口上を言いながら（残念ながら意味は分からなかった）プレゼントの袋を一つずつ取り上げると、袋に書かれている名前を読み上げ、それを渡す。渡された方は、その場で袋から中身を出して、披露し、感想を言うこともあるし、送り主が、どうしてその品を贈ることにしたのかを説明をすることもある（これが多かったような気がする）。身内や友人が、お互いの好みや求めているものを考えて、時間をかけて贈り物を決めるということのなかに、互いのつながりを大事にするという意味が込められているのだろうと思う。

そうだとしても、プレゼントの交換が、そうしたつながりを大事にしている証し、つまり大事にしてきた結果なのか、大事にしているという目的なのか、つまり、皮肉な見方をすれば、こうした形がなくなるとつながり自体が怪しくなってしまうのか、どちらなのだろうかと思った。少なくとも、形以上に重要な機能を持っていることは確かなようだった。

参加者一人一人が全員のプレゼントを持ってくるとい

ような難解な説明で、まさに三日坊主で中断した。二月になつたら、前の月の分と、二日まとめてやればいいと楽天的に考えたのだが、一日分でも出来ないことが、二日まとめて出来るわけもなく、今や三月、新型コロナ対応でやるが増え（非常勤講師で担当する授業が、オンライン授業となり、そのための準備をしなければいけなくなった）カレンダーの蓄えは増える一方である。

南半球ではあったが、はじめての本場のクリスマスパーティーに参加できて、有意義な一時であった。ただし、水着を着てサーフボードに乗ったサンタクロースにも、赤いコートを着た伝統的なサンタにも出会わなかった。クリスマス・パーティーの後で参加したツアーで利用した宿泊施設のロビーには、雪景色のなかでのクリスマスデコレーションが施されていたので、真夏のクリスマスといえども、クリスマスは雪の中でなくては気分が出ないということなのだろうと思った。

【ツアーに出て考えたこと】

マーガレット・リバーは、パースのおよそ三百km南を流れる、インド洋に注ぐ川の名称であると同時にその河岸に開けた町の名前でもある。いや、一つの町の名前というよ

わけではなかったように思うが、一人が数個は受け取っていたし、それぞれにエピソードが付け加えられるので、かなりの時間をかけてのセレモニーとなった。

私たちが用意していったのは、女の子ばかりということ（ボーイフレンドは想定していなかった）、日本の折り紙や民芸品といった、日本土産の定番のものだったから、受け取った子どもたちの反応も、想定通りのものだったが、大人たち用に家内が用意したサランラップは、これも想定内と言えそうだが、かなりの喜ばれようだった。同じようなものは、こちらのスーパーでも売っているが、日本で売られているものとはかなり品質が違わらしく、ヘレンが日本に来たときには、必ずと言っていいほど、大量に買い込んで帰るのを見ていて、これに決めたのだった。

プレゼント交換で、大学生の女の子がボーイフレンドからもらったものが気になった。それは、英語版日めくりカレンダーで、一日一言、おそらく、英語圏の人にもあまり馴染みのない言葉とその使われ方や由来が説明されているものである。見せてもらって面白そうだったので、どこで手に入るのか尋ねると、プレゼントが重複してしまったので、一つあげるといって頂いてきた。

一月一日の帰国だったので、さっそく帰った日から、一日一言を始めたのだが、辞書の助けを借りないと読めないり、フランスのボルドーやブルゴーニュと同じように、ワインの産地として有名な地域の名称と言った方が適切かもしれない。東西約二十km、南北百数十kmの中に、数えきれないくらい（地図に載っているだけで四、五十軒はあるだろう）ワイナリーが点在していて、我が国にも、ここからたくさんワインが入ってきているので、ご存知の方も大勢いらっしゃるだろう。

オーストラリア大陸は、我が国の四国を少し太らせた形をしている。その太らせた四国を何十倍かに拡大してオーストラリアに重ね合わせれば、松山から足摺岬りまでが西オーストラリアの海岸線、豊後水道がインド洋ということになる。私たちが滞在していたパースを宇和島とすれば、マーガレット・リバーは足摺岬の少し手前、宿毛あたりになるだろうか。ただし、宇和島と宿毛の間がおよそ三十kmなのに対し、パースとマーガレット・リバーの間はおよそ三百km、大雑把な例えだが、身近で言うと、横浜―名古屋間がそれに該当する。これを、バスの日帰りで観光すると考えると、かなりタイトなスケジュールになると考え、私たちは一泊二日のツアーを選んだのである。

パース駅からタクシーで十分ほどの所にある、カジノの入った大きなホテルの駐車場が集合場所だった。ツアーの

案内書を手にしたとき、なぜ、駅から遠いこんな不便な所を集合場所にしたのだろうかと思議に思ったが、(私たちは、車で送ってもらったので、実際には不便は感じなかったが) 実際に行ってみて、その理由がよく分かった。

「私たちが選んだツアー会社は、わが国で言えば「ほとんどのバス」のような大きな会社らしく、パースを起点に、毎日、北へ南へと数多くのツアーを催行している。何百人もの乗客と何十台もの大型バスを、朝の限られた時間に集められる場所を、駅前の便利な所に用意することは、広大なオーストラリアとはいえ、容易なことではない。カジノとは、いい所に目をつけたと思った。駐車場はガラガラだったから、朝から博打に興じる人はいないということなのだろう。ツアーバスとしては、朝が大事なのであって、帰りは主だったホテルまで送り届けることになるので、夜の心配はしなくていいのだ。

朝八時の出発というのは、いささか早すぎるような気もしたが、首都圏から名古屋までの日帰り観光と思えば仕方がない。この時間に出ても、帰りは十時を過ぎるはずである。真夏とはいえ、朝の早い時間なので、ひんやりする感じがするのは、空気が乾いているせいかもしれない。

バスに乗り込んでしばらくすると、前の方からプリントが回ってきた。運転手から、口頭での説明があったのだから、聞いてきた。

インターネットが使えない環境にある方は、グーグルマップを開き、画面の中央に西オーストラリアのパースを表示してみてもいい。パースから、海岸線を二百kmほど南に辿っていくと、バスセルトンという海辺の街が見つかる。画面を衛星写真にして、縮尺を大きくしていくと、海岸から沖に向かって、細い一本の線状の人工建造物らしきものが見えてくる。これは、かつて船が荷物の上げ下ろしに使っていた棧橋で、現在は、昔の棧橋を沖合まで延ばし、全長二kmほどになっていて、多くの観光客を集めている。一説によると、ここは宮崎駿の「千と千尋の神隠し」の舞台に使われたということだが、私はその映画は見えていないので事の真偽は分からない。

二kmの距離ということは、片道三十分(トロッコ電車が走っているが、混んでいるので歩いた方が早い)、先端に着いて待ち時間なく海底水族館に入れたとして三十分、帰りに三十分かかるのが最短の予定時間であろう。途中で写真も撮るだろうし、人気のスポットだから幾ばくかの待ち時間は必至だとすれば、最低でも二時間は見なければならぬ。時間に追われるツアーでは、棧橋の入り口から写真を撮るのがせいぜいなのであった。

帰ってからヘレンに、棧橋には触ってきただけと話すと、「そこまで行って歩いて来なかったというのはあり得ない。

うが、聞いていたとしても理解はできない。プリントには、食事のメニューらしきものが印刷されていたので、昼食か夕食の注文を取っているのだろうと解釈し、周囲の人たちが皆サインをしているのを見て、それに倣って適当な料理名のところに名前を記入して後ろへ回した。

三時間ほど走ってトイレ休憩となった所でバスを降りようとする、運転手に呼び止められた。提出した注文票に間違いがあったらしい。よく聞いてみると、注文は日帰り客のための夕食メニューで、私たちは日帰りではないので、そこには含まれないというのである。私たちが該当しないことを確認すると、運転手は二人の名前をボールペンで塗りつぶし、日帰り客の人数と食事の数が合っていることに安堵したようだった。こちらとしては、日帰りと一泊二日のシステムの違いがまだ十分に飲み込めていないので、なんだか夕食が取り上げられてしまったような感じがして、一抹の心配が残ったのである。

ツアーから帰って気づいたことだが、このトイレ休憩で寄った所は、このツアー最大にして唯一の観光スポットではなかったかと思うのである。残念ながら、ツアーでは、その観光目玉の端っこに触れただけで終わってしまったので、後日談を交えた補足的な説明しておこう。

もう一度行こう」ということになり、ツアーから帰った翌日に、改めて彼女の運転する車で出かけたのだった。

潮風に吹かれての二kmの海上散歩は面白い経験だった。ただし、心配がないわけではなかった。インド洋で地震があつて津波が発生したら、絶対に助からないだろうということである。そうした心配は不要なのか、棧橋の途中で、海に飛び込んで海水浴に興じる人たちがいたり、長い竿を振り回して魚釣りに興じる人たちがいたりした。釣りは昔からずいぶん盛んだつたようで、棧橋の欄干には、ここで釣りをしている命を落とした人の名前入りのプレートが何枚も飾られていた。どのような事故で犠牲になったのかは分からない。酔っ払っていて足を踏み外したのかもしれないし、仕留めたと思つた大きな獲物に、逆襲され海の中に引きずり込まれたのかもしれない。そうした犠牲者がいたことを知らせるプレートを横目で見ながら釣りをすると、この神経が、私には理解出来なかった。

バスの車窓から外を眺めていて、気になったことが二つある。

一つは、道路際のほとんどが、耕作地になっていることだった。この大陸の中央部はもろろん、この西オーストラリアでも、北の方に向かって町を出れば、ただちに道の両

側はアウトバックと呼ばれる荒涼とした砂漠地帯になっていたように思う。マーガレット・リバーを中心にした西オーストラリア南部は、高さ二、三十メートルにも及ぶ大木が密生するような湿潤な地で、耕作に向いている土地柄なのである。この地に、ヨーロッパからの入植が早かったのはそのため、ワイナリーは、そうした歴史の産物でもあるのだ。そのことと関連して、もう一つ気づいたことがあるのだが、それについて述べる前に、一つ寄り道することをお許しいただきたい。

今回の豪州旅行の予定を立て始めて間もなく、大陸の中央部にある、巨大な一枚岩として有名なエアーズ・ロック（最近では、先住民の言葉で、ウルルと呼ばれることが多い）が登山禁止になったというニュースが伝わって来た。ここには、二十数年前、二年続けて家族で出かけて登ってきたが、当時から、ここは近々登れなくなるという話は伝わっていた。ウルルは、先住民族にとっては神聖な土地として敬われてきたところだが（わが国で言ったら、さしずめ伊勢神宮か出雲大社に該当するか）、オーストラリアにとっては重要な観光資源ということで、簡単には登山禁止には踏み切れなかったものと思われる。それがようやくアボリジニの手に戻されることになったのである。

さて、ここに来て気づいたもう一つのことというのは、地を左右に見ながら、ハイウェイはもろんのこと、それほど広くはない田舎道を、時速九十kmを越える速度で疾走する。わが国だったら制限速度は五十km、間違っても六十kmにはならないような片側一車線の曲がりくねった道を辿って、この日の観光目玉の一つ、鍾乳洞へ到着した。

東京の奥多摩にだって、大きな鍾乳洞があるので、特に驚くほどのことはなかったが、意外だったのは、少しも水が流れていなかったことである。鍾乳洞は、水分が石灰岩を溶かして出来上がったものなので、我が国だったらどこでも、ポタポタと天井から水滴が落ちてくるイメージがある。水が落ちてこないということは、鍾乳洞が出来上がったから、随分と長い時間が経って、もやは鍾乳洞としては成長していないことを示しているのかもしれない。

鍾乳洞からさらに南下して、ツアーの最終目的地、南端の灯台に向かった。四国で言えば足摺岬の灯台ということなら伝えやすいのだが、そこよりは少し（といっても三百kmほど手前）の、インド洋の波と南大洋の波がぶつかり合うのを見渡す岬に立っている灯台だった。高い所に人影が見えたので、登れるのかと思ったが、それは灯台のメンテナンスをしている人のようだった。

夕方が近づいているとはいえ、真夏の太陽はまだ高く、日よけのための頬被りの手拭いを強い風にあおられながら

その先住民族のアボリジニについてである。アリス・スプリングスなど大陸中央部の砂漠の中の町ではもちろんのこと、北部のダーウィンでも、東部のシドニーやメルボルンでも、市内を観光していて、彼らの姿を見たり、その文化（といっても、土産物程度のものだが）に接したりするのは珍しくはないのだが、マーガレット・リバーでは、街中をゆっくり見て回る時間がなかったせいもあり、彼らの姿や文化に接することはほとんどなかった。砂漠の民・アボリジニと言われているので、湿潤なこの地は、彼らには住みにくかったのかと思ったりもしたが、同じ人間、水分が不要な訳はないのである。

この地に、アボリジニの影が薄いのは、西オーストラリアへの入植が、湿潤・温暖なこの辺りから始まったために、早くから彼らは根こそぎにされてしまい、すっかりこの地から追いやられてしまったということなのだろう。アボリジニのことを知らずに来れば、西欧的なのかな田園風景ということになるのかもしれないが、大陸中央部や北部でアボリジニの存在に強烈な印象を受けてきただけに、何か違うような感じがするのである。アボリジニの姿が見えないことが、皮肉なことに、ここをオーストラリアらしく感じさせないと言ったらいいだろうか。

五十人ほどが乗った大型ツアーバスは、ブドウ畑や放牧灯台をぐるっと一回りして、急ぎ足で帰りのバスへ向かった。

灯台近くの売店に、日本人の親子連れがいたので、声をかけてみると、ご主人が日本からマレーシアに出張中で、冬休みを利用してここに来たとのことだった。

海外旅行中に、日本人らしき人と出会うと、何となく気まずいような感情に囚われるのは私だけだろうか？この日も、灯台に向かう集団の中に、私たちよりは少し若い日本人らしい夫婦の姿を見かけたが、気がづくると、少し距離を取って歩いているのだった。磁石の同極同士を近づけるような感じと言ったらいいだろうか。親子連れに声をかけたのは、そうしたことへの反省もあったのだが、子どもがはつきりとした日本語で話していたので声をかけやすかったということもあった。

帰路につき、どれくらいの人が一泊二日ツアーなのかかと思っていたのだが、途中のホテルで降りたのは、私たちを含め三組で、なぜか宿泊先は別々だった。私たちの泊ったリゾートはかなりグレードの高いリゾートだったように思う。部屋は広く清潔だったし、食事もスタッフの対応も悪くなかった。マーガレット・リバーでお勧めの宿泊先を知らないかと聞かれたら、自信を持って紹介するところだが、三月の下旬になって、しばらく臨時休業するとのメールが

入った。この地でも、新型コロナウイルスの影響が出ているようだ。チェックインのときに、夕食券と朝食券が渡されたので、それを持って夕食のテーブルに着くと、アジア系の顔つきをした男性が注文を聞きに来た。飲み物と食事を伝えると、「日本人？」と見事な日本語で聞いて来たので、そうだと答えた。すると、自分の顔を指さして「ビルマ！」と教えてくれた。年齢は私より大分若かったろうか。力強く「ビルマ！」と言った言葉に、「自分はミャンマーという国名は認めていないのだ」という強い意志が込められているように感じた。軍事政権を逃れてやってきたのに違いない。異国という不便さはあっても、自由には代えがたかったのだろう。後で、「ああ、アウン・サン・スーチーさんは、日本で勉強したことがありますね！」と言えば良かったと思うが、とっさのときに、なかなか気の利いた言葉が出てこない。

翌朝、指定された時間に入り口で待っていると、一台のSUV車が停まり、すらりとした体系のチャーミングな若い女性が降りてきた。他に待っている人はなく、真っ直ぐ私たちの所にやって来ると、ツアーのピックアップに来たというのである。どこかでマイクロバスにでも乗り換えるのだろうかと思ったが、この日一日、彼女が我々二人の、プ

ライベートガイドだという。ラッキーには違いないが、言葉の不自由な身としては、場が持つのか、心配を抱えての二日目のツアーとなった。

パースを出るときに渡された案内には、二日目はグルメツアーになるとは書いてあったが、どういう観光名所に行くのかの情報は全くなかった。妻は、お買い物ツアーになることは想定していて、むしろそれを楽しみにしていたようだが、私としては、伝統的、一般的な観光を想定していたので、名所旧跡の案内のないのは不安だった。

よくよく考えてみれば、前日に回った観光名所と言えば、鍾乳洞と岬の灯台の二つだけだった。片道三時間以上もかけてやって来て、見るところ二つというのは寂しい気もするが、これは時間がないのでそれ以上は行けないというのではなく、行こうにもそれ以上の名所はないというのが実際のところなのではなからうか。いや、そんな風に言うのは失礼かもしれない。手軽に見て回れるようなところがないだけなのであって、一カ所に半日も、一日も時間がかけられれば、いいところはあるのかもしれない。観光というと、京都や奈良のような所を想像し、半日でいくつお寺が回れるかという尺度で考えてしまうが、この国は、そういう尺度で測ってはいけないのだった。

理由はともかく、この日のグルメ・メニューを書き出し

てみれば以下の通りである。

マーガレット・リバーということで、ワイナリーでのテイastingが、グルメツアーの中心というのはずなところである。一カ所で何種類かの飲み比べができるので、ワイン好きにはたまらないだろうが、私は特にワインに明るいわけでもないで、猫に小判であった。それでもテイastingに入ったところに客が大勢いれば、味見だけ出てくることも可能だが、私たちだけしかないようなところでは、何もかわずに出てくる勇氣もなく、結局、ヘレンへのお土産も併せて五、六本ものワインを買うことになってしまったのである。

コーヒー豆の焙煎工場にも寄った。ハワイのコナコーヒーのように、マーガレット・リバー特産のコーヒー豆があるわけではないが、ここに焙煎工場があるのは、地域の活性化を目指した観光産業の一環なのだろうと思った。昼前の時間帯だったが、地元の人たちも利用しているようで、結構、賑わっていた。私たちの相手をしてくれたお兄さんはタブレット型の自動翻訳機を持っていたので、言葉の問題は若干解決されたが、それよりも、私がコーヒー好きで豆に多少のこだわりを持っていることが幸いしてお兄さんとは話が合い、盛り上がった楽しい一時を過ごしてきた。お陰で、二五〇g入りの袋を三袋も買うことになってしま

ったが、オーストラリア産の豆ではなく、中南米産、インドネシア産、アフリカ産であった。

三軒目のワイナリーで昼食となった。広大な庭園に、大きな池が作られていて、それを臨むベランダでの食事は気持ち良かった。天候も良く、日本で言えば、爽やかな夏の高原を思わせるような中での昼食だった。池に、サンタクロースの人形を乗せた小舟が浮いているのがご愛敬だった。

他にも、チョコレート工場やチーズ工場にも寄ったが、これらについては割愛する。

グルメツアー以外で寄った名所(?)と言えば、この地域の名前の由来となったマーガレット・リバーの河口が唯一のものだった。地図には、水をたたえてインド洋へと流れ込む大河が描かれているが、乾期のこの時期、川は海にはつながっておらず、海の手前に大きな水たまりが残っていて、生暖かい水で大勢の子どもたちが水遊びをしていた。

朝ピックアップされたリゾートに戻って来て、プライベートガイドだったお姉さんと別れ、前日「ビルマ！」と会ったレストランで、夕食を取ることになった。この頃になって、ようやく一泊二日ツアーの仕組みが分かってきた。

パースからは、ほぼ毎日、日帰りツアーが出ているようだった。その中に、一泊二日ツアーを希望する者がいると、

その人たちだけを現地に置いて、バスは帰ってしまう。そして、翌日、日帰りツアーとしてやってきた別のバスが、前日置いていった客を拾って、パースへ戻るといふ仕組みである。

夕食をとっていると、前日の我々と同じような集団がにぎやかにレストランに入ってきた。パースに帰る日帰りツアーの人たちなのだろうと見ていると、間もなく運転手らしき男性が私たちの席までやってきて、名前を確認し、バスの出発時刻を教えてくださいました。

大型バス一台分なので、四、五十人の乗客がテーブルについていた。メニューは多少絞られてはいるものの、限られた時間内で全員の注文に応じられるものなのか、人ごとながら心配したが、注文がそろうまでにはかなりの時間差があったにもかかわらず、大きな声をあげるような人は誰もいなかった。

私たちの所からそれほど遠くない席で、日本人らしい若い二人連れが食事をしていた。外見から日本人と思っただけ、何語で話しているのかは、聞き取れなかった。

パースへ向けてバスが出発して間もなく、先ほどの二人連れのうちの男性が、後部にあるトイレに行くために私たちの脇を通り過ぎようとした。そのとき、どちらからともなく声をかけ、互いに日本人であることを認識したのだっ

た。彼は、用を済ますと、すぐには自分の席に戻らず、私たちの近くの空いていた席に座った。連れの女性について聞くと、たまたま食事の席が一緒だっただけで、ずっと一緒だったわけではなく、彼女は中国人とのことであった。

彼は専門職に就きながら、ワインのソムリエの資格も持っているというユニークな人物だった。マーガレット・リーパーへのツアーを申し込んだのも、ワインのテイステイングが目当てだったのだが、日帰りツアーでは、それが一カ所だけだったので、物足りないとのことだった。現地ではバスを降りて、個人的にワイナリーを回ることも考えたようだが、ツアー会社からは却下されたらしい。

私たちのグルメツアーの話をする時、羨ましそうにしていたが、行動力のある人のようなことから、案外、改めてグルメツアーを申し込んだかもしれない。

夜十時を過ぎて、パース市内に戻ってきた。順番にホテルで乗客を降ろし、バスには数人しか残ってはいなくなった頃、町の中心から少し離れたホテルの前でバスが停まった。車寄せの近くに、ヘレンの車が待っていてくれた。